

東 北 漫 步

(青森縣の卷)

和 泉 生

青森縣の昭和十年度維持修繕費が、二十萬圓から十萬圓に轉落したので當時の土木課長松浦氏が、本省の某氏等から猛烈なる攻撃を浴びた受難劇を知る人も相當あらう。十萬圓削減の先入主が然らしめたものか、其の後誰言ふとなく「青森縣の道路は日本一悪い」との流言が飛び始めた。

それは勿論、道路維持修繕費を半減したのにも依るかも知れぬが、其の頃悪道路では青森と五分の一の勝負をしてゐた秋田縣の道路が、僅々數年間に一躍横綱の地位を獲得した勢もあることは、誰も否定出来ぬであらう。惡口連に、青森縣内をドライヴしても決して居眠りはせぬが、秋田縣内に這入るとすやく眠れるなんて皮肉を無遠慮に叩かれ

ては、土木界切つての雄辯課長松浦氏も、腐らざるを得なかつたらう。そこで松浦氏は、日夜之が復活に全力を傾注したのであるが、遂に雪辱ならずして昭和十二年四月奈良縣に轉任されたことは、衷心氣の毒に思ふ。

後釜に誰が座るかはしばし注目を惹いてゐたが、愛知縣の道路課長小坂氏が榮轉されたことは、無上の慶びと期待で胸が躍つた。小坂氏は着任早々從來の悪評を一掃せんものと、土木中特に道路の向上に涙ぐましい努力を續けられたことは感謝に堪へない。先づ道路改良の標準を隣縣の秋田に求め、各土木出張所長はじめ道路工夫の一團を秋田縣に派遣し、或は國民精神の高揚強化を機として、道路愛護

運動を起すの外、十萬圓の道路維持修繕費を昭和十三年度には十三萬圓餘に競り上げる等、其の切れ味の佳さには胸がすつとする。現在青森縣の道路が躍進の一途を辿りつつあることは、小坂氏自身の奮闘努力に俟つもの實に多大であるが、手島經濟部長が道路に對して素晴らしい抱負と理解の持主であることを忘れてはならない。手島氏と小坂氏とは實に名コンビで、外目も羨しく、共に寡言實行の士であることは力強い。昨年九月十日の廳員道路愛護デーには、後鉢巻、卷脚絆の颯爽たる姿で、砂利運搬の持籠を擔いでる兩氏を觀る時、其の眞面目躍如たるもののが伺れる。手島氏こそ、東北地方に於ける經濟部長中此の道のナンバー1であらう。

國道は岩手縣より青森市に至る四號國道百十五杆及秋田縣より弘前市を經由して青森市に至る五號國道七十一杆計百八十六杆であるが、孰れも昔ながらの參勤交代街道の域を脱しない。其の内直轄改良されたものが、昭和七年度より同十三年度に至る七箇年に僅に、三十七杆二百八十米で

あつて、縣内國道總延長百八十六杆に對し五分の一にも當らない。直轄國道改良工事の最初の着手は、交通量に於ては縣下隨一の青森市と淺虫温泉間の鋪装であつた。本區間は十八杆であるが、鋪裝の恩惠に因り自動車を駆れば二十分で行ける眼と鼻の先の間隔に短縮され、省營バスのスピードも大したものだ。

淺虫温泉は其の昔、圓光大師が巡錫して當地に來りし時、蒸氣沸々と湧く叢中に一頭の牡鹿が浴するを觀て、はじめ浴場を設置させたとの傳説を有する。土地の人は之を麻蒸の湯と稱してゐたそうであるが、後日何時しか淺虫と改稱された様だ。此の温泉は、海の温泉郷の名に恥ず四季の風光明媚にして旅の無聊を慰むるに適し、裸島、鷗島又は湯の島を縫ふ白帆を、爽かな潮鳴を聞きつゝ朝の窓から望むのも一入興味深いものがある。灯點す頃ともなれば、二百を超ゆる阿嬢の艶姿と、鼓絃の騒めきは忽ち歡樂境を現出する。此の地に遊んだ誰もが、素晴らしいとか、愉快とかの讃嘆を列べるがその氣持はよく解る。然し最近物凄い

雜香を呈し却つて低級味を帶びたことは争へぬ事實で、左

程思ひ出の湯の街とも思へないが、若い人にはやはり何か知らう意味があるのでなからうか。其のうま味が淺虫小唄で伺はれそうだ。作詞は御存知高橋掬太郎氏である。

一、沖の漁火誰ゆえ燃える
わたしや君ゆえ

燃えて浮名の波が立つ

浮名ばかりのササ波が立つ

二、手に手とり合ふ飛石づたひ

裾が濡れましよ

戀に濡れましよ裸島

濡れてうれしいササ裸島

三、戀の牡鹿の音も床し

姫妓いとしや

夢に温泉の香がこもる

温泉いろよいササ香がこもる

四、胸に吹くのは戀風靡風

岬八丁

月もおぼろの善知鳥前

影もおぼろのササ善知鳥前

青森弘前兩市間の國道鋪装も、軍事上並經濟上緊要缺くべからざるものがあるので、昭和八年度以降之が完成を急いでゐる。北支へ渡つた池田徳治氏の後任として、壯々天野良吉氏が後腕を奮つてゐるが、何と言つても八十五杆の長區間であるのと、豫算の關係上四年や五年で纏りそろはない。弘前市は第八師團の所在地と城下街と言ふだけで別に取柄の無い都市であるが、津輕美人の代表地として傳説されてゐる。面白い挿話の持合せもあるが、風紀紊亂の虞があるから遠慮させて頂かう。青森市の入口にも大鶴温泉がある如く、弘前市の入口にも大鶴温泉がある。此の温泉も背後にはスキー場として有名な阿闍羅山が聳へ、津輕富士の遠望も利き風景の佳さは淺虫に優るとも劣らない。比較的の閑静なと粹な滋味があるので、淺虫よりじつくり温泉氣分に浸れること受合だ。一昨年某事件惹起以來、あ酌制

度が窮屈になり、好色連を落膽させてゐるそなうだが、心ある者は手を叩いて満足してゐるだらう。

直轄國道改良工事の概要を示せば左の通である。

| 年度 | 路線 | 改良區間 | 延長 | 工種 | 有效 幅員 米 | 工事費 円 |
|----|-----------------------------|------|-------|-------|---------------|----------|
| 七 | 四 東津輕郡野内村 | | 二、五八三 | 塗、改、鋪 | 六〇乃 至七五 | 一〇〇、〇〇〇 |
| 七 | 四 同 郡同 村久栗坂 | | 三九 | 改、鋪 | 七・五 | 一〇〇、〇〇〇 |
| 八 | 四 自青森市造道 至同 市大野 | | 三、五三 | 橋、改、鋪 | 三・〇 | 三〇、〇〇〇 |
| 八 | 五 自青森市冲館 至同 | | 一、〇四 | 改、鋪 | 一・〇 | 三、二〇 |
| 九 | 四 三戸郡留崎村日時 | | 一六 | 改、橋 | 七・五 | 五、〇〇〇 |
| 九 | 五 自中津輕郡和德村 至弘前市富田町 | | 二、八七 | 鋪 | 一〇〇 | 一、〇〇、〇〇〇 |
| 九 | 四 自東津輕郡野内村淺蟲 至同 郡同 村久栗坂 | | 二、四一〇 | 改、鋪 | 七・五 | 五〇、〇〇〇 |
| 九 | 五 自中津輕郡和德村撫牛子 至同 郡同 村津賀野 | | 一、二〇〇 | 改、鋪 | 八・〇 | 五〇、〇〇〇 |
| 一〇 | 四 自東津輕郡野内村久栗坂 至青森市造道 | | 一、五〇〇 | 改、鋪 | 七・五 | 三〇、〇〇〇 |
| 一〇 | 五 自中津輕郡和德村 至同 郡同 村久栗坂 | | 一、七五〇 | 改、鋪 | 七・五 | 一〇〇、〇〇〇 |
| 一一 | 四 至南津輕郡藤崎町 | | 一、七五〇 | 改、鋪 | 七・五 | 一〇〇、〇〇〇 |
| 一一 | 五 自東津輕郡新城市 冲館村 | | 一、七五〇 | 改、鋪 | 七・五 | 一〇〇、〇〇〇 |

| | | | | |
|----|------------|-----------|-----|---------|
| 一二 | 五 至同 郡富木館村 | 四、〇〇〇 改、鋪 | 七・五 | 一〇〇、〇〇〇 |
| 一二 | 五 東津輕郡新城村 | 三、五〇〇 改、鋪 | 七・五 | 一〇〇、〇〇〇 |
| 一三 | 五 同 | 一、七五〇 改、鋪 | 七・五 | 一〇〇、〇〇〇 |
| | | 計 | | 三、二八〇 |

府縣道總延長は二千百五十五糠二百八十九糠で、救濟事業時代の局部的改良を除外せば、僅かに東北振興府縣道改良工事に依り、昭和十一年度より同十三年度に至る三箇年に四十四糠三糠を執行したるに過ぎず、之を總延長に比較する時は漸く五十分の一にしか當らない。例の松浦氏の祟りもあらうが國庫補助配當額は東北六縣中最下位で、恰も繼子苛めの感があつたが、小坂氏の就任以來漸次緩和の傾向を辿りつゝあるのは當然であらねばならない。繼子苛めの證據が左表で領けるだらう。

| 縣名 | 昭和十一年度 度事業費 円 | 十二年度 | | 十三年度 度事業費 円 | 計 度事業費 円 |
|-----|---------------------|---------|---------|-------------------|----------------|
| | | 十二年度 | 十三年度 | | |
| 青 森 | 三三一、〇〇〇 | 三三一、〇〇〇 | 四三一、〇〇〇 | 一、一三三、〇〇〇 | 四、一三三、〇〇〇 |
| 岩 手 | 六三一、〇〇〇 | 六三一、〇〇〇 | 五六九、〇〇〇 | 一、一三一、〇〇〇 | 三、一三一、〇〇〇 |
| 秋 田 | 六〇〇、〇〇〇 | 六〇〇、〇〇〇 | 六〇〇、〇〇〇 | 一、七六六、〇〇〇 | 三、一七六六、〇〇〇 |

| | | | |
|----|--------|--------|----------|
| 山形 | 八萬、〇〇〇 | 七萬、〇〇〇 | 二、三万、〇〇〇 |
| 福島 | 三萬、〇〇〇 | 三萬、〇〇〇 | 六八、〇〇〇 |
| 宮城 | 一〇、〇〇〇 | 七〇、〇〇〇 | 二、五六、五〇〇 |

昭和十四年度以降、東北五縣並に國庫補助額が配當さるるとせば、小坂氏の男も立つだらうし日本一惡道路の評に對し將來への輝きを増すものと信ずる。府縣道改良工事は、八戸市、南津輕郡黒石町、北津輕郡五所川原町及下北郡田名部町を中心として發展しつつあるが、十六本の指定府縣道と重要幹線の完成は、私が生れ變つて来る頃だらうと豫言しても、よもや笑ふ人も無からう。小坂氏は強硬な鋪裝論者で、指定府縣道及重要幹線は是非共鋪装し、降雨期竝融雪期に於ける道路の破損を防止すると共に、交通の難澁を救濟すべきだと常に主張してゐるが、實情に即した見解と思ふ。昨年六月本省で開催された土木主任官會議に於ても「東北地方の府縣道鋪裝費は改良費以外に補助の途を講ぜられ度」と當局に迫つたのは、平素の抱負を其の儘吐露した熱意の顯れとして買つてよい。又青森市十和田湖間を

改築鋪装して世界的觀光道路を實現したいと念願してゐるが、此の事業完成の曉には我が道路界に一大波紋を授するであらう。

青森市十和田湖間は昭和九年八月から有營バスの運行を開始してゐるが、降雪の爲毎年半年を休業せねばならぬので後の半年を大馬力で稼いでゐる。九十糠を約四時間で走るのであるが一圓九十二錢は割合安い。現在の道路は路面の凹凸甚敷且幅員狭小にして屈曲多く、戰車もどきの唸りを發して駆ける時早駕に搖られてゐる様で、思はず前方の手掛けをぎゅっと握り占めざるを得ない。若い娘さん達が、沿道の景勝や風光も何のそのバス嬢の名臺詞も半聞で悲鳴を上げる等全く酷い。小坂氏が觀光道路として鋪装を叫ぶのも無理からぬことだ。然し此の嶮道にも、嘗て試験的に執行した鋪裝箇所がある。僅か百米に足らぬものであるが、此の區間を滑る瞬間は速に鋪装の醍醐味が染々感ぜられ、何回も往復してみたくなるのは滑稽だ。

青森市を發つて約一時間半、周囲の林相美を満喫しつつ

八甲田の山麓酸湯温泉に到着する。八甲田山は、青森市を南方に距る約二十四粁、海拔千六百米の休火山で天生する植物の種類多く、其の地形は無限の變化に富み、自然の妙味に讃美を惜まぬ者がない。此の山は絶好の山岳スキー場として知られてゐるが、明治三十五年一月二十三日、歩兵第五聯隊は山口少佐を大隊長とする戰時編成大隊の雪中行軍を行ひ、八甲田山横斷の壯舉を敢行せしも田茂木野、田代間に於て大暴風雪に逢ひ、寒氣凜烈の爲僅に十數名を残して約二百名悉く凍死した。萬死に一生を得たる後藤軍曹は、探索隊の目標とならんが爲暴風雪の中に直立の儘凍死せんとしたが幸に發見せられ、詳細に血と涙の遭難報告をなしたるに依りはじめて手掛りを得、山口少佐以下十六名を救出し病院に收容することが出來た。然し其の内六名は死亡し十一名は命を全ふしたが、八名は不具者となつた。惜い哉後藤軍曹も其の一人である。翌三十六年、殉難者の墓地と後藤軍曹の銅像除幕式を此の地に行ひ、陸軍次官寺内將軍臨席して莊嚴なる供養を行ひたる事實は餘りにも有名

である。此の事件が諸外國に惡宣傳され、日本軍人は雪に弱いとの噂が蔓延し由々敷一大事となつた。それで師團長立見將軍が此の不名譽を憤慨し、難所來瀧峠の雪を衝かしめ、見事突破に成功して東北男兒の意氣を發揮したる後日譚は、聞く者の涙を誘ふ。又山口少佐の嚴父が、我が子を病院に見舞つた時、此の慘事を痛く苦慮し、「部下多數を殺して汝獨りおめ／＼生きるとは何事ぞ。潔く切腹せよ」と激怒して退去した態度は、日本軍人の父としての面影縱横である。

酸湯の發見されたのは元祿時代との記録がある。横内村の獵師某が射損じた鹿の浴してゐるを見て靈泉なるを覺り、此處に湯小屋を建立し鹿の湯と呼んだのが、今日の酸湯のはじまりだと傳へられてゐる。藩政時代は南部領に近接してゐたので、津輕藩から勤番士が出張して取締つたと謂ふ。酸性硫黃泉で多人數の收容が叶ひ、自炊舎の設備もあるので、三月から十月にかけて賑ふ。附近には地獄湯、蒸湯、或は東北帝大高山植物研究所、睡蓮沼、城ヶ倉の溪

谷等探るべき景勝多く、八甲田の登山に、ハイキングに、又スキーに絶好の根據地である。此處から一時間餘り、屈曲ばかりを廻ると葛温泉に達する。周圍は潤葉樹の老林に繞られ、稀に見る閑寂境で湧泉量も豊富である。附近には葛沼、鏡沼、瓢箪沼及世界一清い水を湛へてゐると稱される赤沼等があつて、それぐる獨特の風致を有し散策に相應しい。彼の文豪大町桂月翁愛着の地であり、終焉の地である。

淵澤をすぐれば人の里知らず

葛をわたりて神園に入る

いで湯わくつたの山路のさよふけて

月のみわたる猿の空橋

世の人の命をからむ葛の山

湯のわくところ水清きところ

沼に舟浮け姫鯉釣つて

風呂で月見る山の中

桂月翁が如何に此の風物と野趣を心ゆくまで愛したかが

伺れよう。旅館は一軒であるが、深山の安息所としてよく、時折流れる名知らぬ鳥の音に、思はず耳を傾ける。青森、秋田方面に杖をひかる人々が一度は葛で、桂月翁遺稿の情趣を偲ばるのも無意義ではなからう。翁の墓は、旅館のすぐ東方の蜜林中にあるが、香煙の絶えたことがないと曝された粗末な墓が寂しそうに佇んでゐた。翁は大正十四年六月十一日、旅館の一室で病歿されたのであるが、享年五十七歳であつた。鳥が鳴かぬ日があつても愛酒家だつたらしく、死の前夜數回咯血し、翌朝は疲勞と苦痛とに酷く寝てゐたが、それでもウイスキーがないので蝮酒を口にしたと、田中貢太郎氏の「桂月終焉記」に書いてあり、兒玉花外氏の「桂月翁の墓」中にもそれらしい思ひやりが現れてゐる。

葛山の春雨を酒として

風流翁に献ぜんか

櫻の時は櫻酒

紅葉の頃は紅葉酒

又死の一歩前、枕頭の夫人が「何か辭世の句はありますか」と訊ねた時、翁はいくつもあると言つて「みちのくの、とはだの山に、血をはきて、そのまま死ねば、われはほんもう」と吟じてから「これはまづいから東京の新聞にはむかんかな」と微笑み「ごくらくに、こゆるたうげのひとやすみ、つたのいで湯に、みをばきよめて」と言つたそであるが、「東京の新聞にむかんかな」は、往生間際とも思へぬ。

葛を越えると道路が一層狹悪となり、間もなく、十和田湖の瑠璃水が唯一の落口を求めて北方に流れる奥入瀬の溪流に合ふ。昭和十一年二月、八甲田山、酸湯、葛温泉一帯及十和田湖と共に、國立公園に指定せられた。下流焼山より十和田湖畔子ノ口に至る六軒間の激流、瀑布、樹木等の情緻は、眞に天下の奇勝であり、千古絶景を知らざる潤葉樹の密林、阿修羅の白沫、小島を飛交ふ鳥の姿に、神仙の佳境を行く思ひがする。十和田湖は典型的な陥没火口湖

で、最深三百六十米、世界第三位の深湖であり其の水は二十米に達する透明度を有してゐる。東西十糠、南北八糠、

ほぼ四角形を爲し、東湖、西湖、南湖、北湖に四分せられ、湖岸線の延長は四十三糠である。湖上の周遊は風趣の變化送迎に暇なく、愛らしいモーターランドの解説も殊の外名調で遊覽客を明朗にする。十和田の春は五月に訪れると言ふが、

中旬には湖畔の紅山櫻の蕾が綻び、之に續いて潤葉樹の若芽が色彩り彩りに萌え、萬花の美を競ふかと眼を疑ふ。夏ともなれば、湖岸にキャムプ生活の樂しさが訪れ、十月の

紅葉は大湖を錦の幕で抱擁し、十二月の白一色には、勇壯な山岳スキーが無限の歡喜を齎す。湖の南岸休屋は湖景探遊の中心地で、青森市十和田湖間省営バスの終點である。旅館、賣店連携し遊覽客の誘致戦は遠にお手のものだ。名物は何處も同じの竹細工であるが、姫鱈の味は「名物にうまいものなし」を皮肉つてゐる様だ。

道草を喰つてゐるうちに、もう縣界に辿り着いたが、多年の懸案である青森市十和田湖間を觀光道路とするには、

五箇年計画で完成するそ�だ。何とか之を實現させる妙案は無いものだらうか。

| 改 良 区 間 | 延長 工種 | 有效 幅員 | 工事費 | 執行年度 |
|---|-----------|-------|---------|------|
| 自 東 津 軽 郡 筒 井 村 至 同 郡 荒 川 村 | 一、四〇〇 鋪 裝 | 六・〇 | 三、〇〇〇 | 第一年度 |
| 東 津 軽 郡 橫 内 村 地 内 至 同 郡 同 村 | 一、一〇〇 鋪 裝 | 六・〇 | 一、〇〇〇 | 第二年度 |
| 自 東 津 軽 郡 橫 内 村 境 内 至 同 郡 同 村 雪 谷 | 一、〇〇〇 改、鋪 | 四・五 | 一、〇〇〇 | 第三年度 |
| 自 東 津 軽 郡 橫 内 村 雲 谷 至 同 郡 荒 川 村 飛 地 | 一、〇〇〇 改、鋪 | 四・五 | 一、〇〇〇 | 第四年度 |
| 自 東 津 軽 郡 荒 川 村 飛 地 至上 北 郡 十 和 田 村 谷 地 | 八・六〇 改、鋪 | 四・五 | 一、〇〇〇 | 第五年度 |
| 計 | | | | |
| | | | 四〇・三〇 | |
| | | | 一、三七・〇〇 | |

春が巡つて、小坂氏の青森生活も丸二年となるが、幾多の功績は氏ならではの感が深く。もう一息だ。怒濤を蹴つて彼岸へ進航する希望の船を、心からの喜歎と感激を以て祝福しよう。

道路愛護功績者表彰式の舉行

青森縣土木課

青森縣の道路愛護に就ては「道路の改良」第二十一卷第一号に登載したるが如く、昭和五年制定の道路愛護獎勵規程に據り各審査委員の嚴正公平なる審査の上昭和十三年度道路愛護成績優良者として左記の者を表彰することに決定

去る二月十一日紀元の佳節をトしこれが表彰式を舉行致しました。當日は御下賜金傳達式に次て各種の功績者表彰と共に道路愛護關係者の表彰式を行ひました。

式典は午前十時縣會議事堂に於て關係官民其の他有力者